

## 「激動時代のなかの不易流行」

(特別寄稿) 山形大学国際事業化研究センター副センター長 小野 浩幸 氏



小野浩幸教授は、山形大学国際事業化研究センター副センター長として、産学連携にも取り組まれています。

・**MOTはその使命を終えたのか?**  
このように地域の皆様に支えられて発展してきた山形大学のMOTですが、全国に目を向けると好ましくない傾向が見え始めています。新潟大学がMOTの募集停止にあたってのコメントから一部引用です。「平成26年度以降、定員未充足の状況が続く事態となり、他大学の技術経営学系の大学院の多くが定員未充足とな

っています。状況も鑑みて、(中略)、専門職大学院を解消することとし、平成29年度以降の学生募集を停止することにいたしました。」  
本当にMOTはその使命を終えつつあるのでしょうか。以下は、MOTの必要性が叫ばれていた2005年当時の議論からの引用です。「日本の競争力は知的資産を中心に戦略的な政策を実行した米国に大きく差をつけられている。その大きな要因は技術・知的資源をビジネスや経済的成果につなぐ技術経営力の欠如にあると言われている。したがって、国際競争力を取り戻し、科学技術創造立国を実現するために『ものづくり』の重要性を認識し、技術的バックグラウンドをもちながら社会の幅広い分野で活躍できる人材を育成する必要があります。」

・**目の前の成果にとらわれる風潮に懸念**  
MOT不要論に限らず、すべての事に対して目の前の成果だけを追い求める風潮が最近強まっているように感じます。  
例えば産学連携の分野でも、文部科学省と経済産業省は成果指標を設定し、それによって大学ランキングを付けようとする動きを強めています。2015年12月に文部科学省からランキングが公表され、その資料では、山形大学は過去5年間の共同研究の伸び率が、東大や京大、有名私立大を抑えて全国トップとなりました。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。



↑「平成25年3月の全  
員参加の追出しコ  
ンパ」です。社会人、留学生、日本  
人学生がともに学び  
合います。

ついている状況も鑑みて、(中略)、専門職大学院を解消することとし、平成29年度以降の学生募集を停止することにいたしました。」  
本当にMOTはその使命を終えつつあるのでしょうか。以下は、MOTの必要性が叫ばれていた2005年当時の議論からの引用です。「日本の競争力は知的資産を中心に戦略的な政策を実行した米国に大きく差をつけられている。その大きな要因は技術・知的資源をビジネスや経済的成果につなぐ技術経営力の欠如にあると言われている。したがって、国際競争力を取り戻し、科学技術創造立国を実現するために『ものづくり』の重要性を認識し、技術的バックグラウンドをもちながら社会の幅広い分野で活躍できる人材を育成する必要があります。」

今読み返しても日本が置かれている状況はほとんど変わっていません。むしろ、アジア諸国の台頭によりグローバル競争は激しさを増しています。日本は、自らの強みを再確認し、それに磨きをかけ、広くアジア等の国々とパートナーシップを築きながら発展し貢献していくことが求められています。その意味では、早くも2008年には留学生コースを開講し、社会人、日本人学生、留学生が一つの教室で学ぶ体制を整えた山形大学のMOTは時代の要請とともにあるといえると思います。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。

・**不易流行**  
成果指標(KPI)の重要性はMOTでもよく取り上げます。しかし、KPIは人が駆使するものであって、KPIに使われてはならないことも示唆しています。同様に、時代の変化に合わせて進化することの重要性もMOTではよく指摘されます。一方、進化はダーウィンの「種の起源」で指摘するように「微細な変化の長い積み重ねによってのみ獲得されるもの」です。  
MOTに本来求められるものは決して変わるものではないと考えます。俳句の世界では、決して変わらないものを「不易」と呼び、常に流れ変化していくものを「流行」と呼ぶそうです。この不易と流行の双方の具現こそが至上の境地といえます。  
新年を迎え、改めてこの「不易流行」を意識し、地域に求められる人づくりについて、私なりに問い直してみたいと考えるところです。



## 『私とMOT』シリーズ編

MOT一期生 福島市商工観光部産業交流プラザ 宇野 秀隆 氏

宇野 秀隆 氏  
ネットワーク  
コーディネーター  
として活躍する  
医療連携

宇野 秀隆 氏  
ネットワーク  
コーディネーター  
として活躍する  
医療連携

## ●簡単に自己紹介

オйлシヨックを大学時代に経験し、就職氷河期に卒業。関西の鉄鋼メーカーに7年勤務。

故郷の秋田へのUターンならずUターンで福島県庁技術吏員に転職。公設試の職員として、福島市、郡山市、いわき市、会津若松市の全県各地に勤務。

本来の専門分野は金属材料であるが、故障解析、表面分析、セラミックス、繊維、クラフト：何でも来いの職員であった。一昨年、定年退職。その間2度の産業支援機関への出向を経験し、その経験が多くの人・企業・機関などとの出会いにつながり、その後の人生を大きく変えた。

現在は、福島市のコーディネーターをメインに、東北経済産業局、東北活性化センターのお手伝い、そして会津大学短期学部の非常勤講師としてデザイン系学生に材料学を教える。使命は地元中小企業の活性化。切り口は医療機器関連産業、加速器関連産業、クラフト産業、デザインである。

## ●MOT入学のきっかけ

それは平成13年、産業支援機関である福島県産業振興センターへの出向でした。ここでの仕事は技術系のセミナーや国の大型プロジェクトの管理法人業務や、ものづくり企業の技術開発への補助事業などでした。

技術開発への補助事業では応募の技術的な審査は当然ですが、財務的な審査も最低限必要でした。ずつと理系・技術系の道を歩んできた人生であったため、財務諸表、貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書・・・と言われてもチンプンカンプン。

この時、何か機会があったら経営とか経済を少しままとった形で勉強したいと思ったのが、最初のきっかけです。すでにMOTなる言葉が出た頃だと思えます。平成16年4月出向先から県に復帰し、その夏頃『来年度、福島大学の若手の経営系の先生方が山形大学工学部で講義をするらしいよ』という情報があり、さらに同年12月6日に現在の私の職場である福島市産業交流プラザの『山形大学・福島市産業連携技術交流会』において高橋幸司先生が『MOTの社会的意義と展望』という講演をされ、これに

誘発され受験を決意しました。

当時の勤務地が福島市内であったため通学が容易であったことも大きな動機です。しかし、必要書類の取り寄せに時間がかかり、受験を次年度にしようかと相談したところ、高橋幸司先生から1期生で入ったほうが絶対面白いからと説得され受験し、50の手習いが始まりました。確かにその通りでした。面接の際、飯塚博一先生部長の質問に『地元企業を熟知したコーディネーターになりたい』とお答えしたのを記憶しています。定年退職後、運良くそれを実践中です。

## ●山形大学のMOTの特徴

1期生ですから、先生方も山形大学工学部でMOTの講義は初めてだったのではないのでしょうか？

試行錯誤があるわけですし、通年のスケジュールがしっかり固まる前に半ば見切り発車のようなスタートだったのではないのでしょうか？

現在の講義がどのような形で進められているかはよくわかりませんが、スタート当時は座学中心というより演習的な内容が多く、また外部から企業人経営者、パリのコンサルタントなど多彩なゲストスピーカーが多く、講義終了後の交流会も頻繁で個人的なネットワークキングにも非常に役立ちました。特に故人となられたデンソー元会長高橋朗先生のコア・コンピタンスの演習、野長瀬先生のシベールの企業調査、志村先生のアタッカーズ・ビジネススクールとの交流、神田範明先生の発想法演習や東京の企業研修、元米沢日本電気社長・水戸部知巳さんとの懇親会など印象に残っています。10年近く経っても断片的にでも鮮明に残って



「メディカルショー・ジャパン2008」出展風景  
於：東京有楽町東京フォーラム

いる講義の内容、実践的な内容、これが山形大学MOTの特徴である。現在はどうな雰囲気なのでしょう？

## ●勉学は役に立つのか？ 実践できるか？

卒業と同時に私は二度目の福島県産産業振興センターへの出向となり、担当は福島県内企業の医療機器関連産業への参入支援でした。文部科学省と経済産業省の国費と福島県の県費が投入された大型プロジェクトでした。ただ決められたことを淡々とこなすといったものではなく、大胆かつ新鮮、戦略性を持って行うものでした。プロジェクトのメンバーも大学の研究者、地元の中企業経営者、大企業の事業所責任者など多岐にわたっており、関係者の共通の認識は『ビジネス感覚で事業を実施する』という厳しいものでした。

この事業の中で、様々な企画や実施に当り、MOTでの勉強が100%活かされました。例えば、現在は一般的になりましたが『ものづくり企業が医療機器メーカーの技術者にもものづくり技術を提供する』という展示会がまだ日本国内で開催されていなかった時代に『なければ自分たちが始めればよい』ということ、平成19年11月福島県郡山市において全国規模で初開催しました。

これが現在も続くメディカルクリエーション、ふくしまです。また日本医療機器学会総会の同時開催展示会・メディカルショー・ジャパンにおいて福島県内ものづくり企業15社ものづくり企業・パビリオンに出展しました。異分野展示会へのブルーオーシャン戦略など。

当時、そのような大掛かりな展示を行うグループは皆無で、PR効果は抜群でした。この時、一年間だけで私が私の隣の席で文部科学省事業のコーディネーターをしていただいていたのが、現在MOT准教授の野田博行先生です。当時の野田先生の仕事ぶりを目指して現在も活動をしています。また忘れてならないのが、利害関係も取引関係もない社会人学生間で得られる情報や知識です。私の場合、同期の株式会社高研取締役、山本博武さんが野長瀬先生の講義の中で行った改正薬事法のレクチャーと山本さんの修士論文の発表が、その後というか現在まで非常に役に立っています。一般的な製造業とは異なる医療機器メーカーの文化と風土を学ばせていただきました。

## ●これから

現在の仕事は単年度契約であるため、いつまで出来るか確約はありませんが今後も医療機器、加速器、クラフトを中心に活動していきたい。AM(Addition Manufacturing)技術関連も何か手掛けれられないか模索中です。これからもMOTで学んだことを活かしながら地元中小企業の活性化に努めたい。



## グローバル研究会開催(第17回)

## 野長瀬裕二教授、日本ベンチャー学会賞を受賞!



参加者の質問に丁寧に答えられる、講師の浜中真人氏

第17回を迎えたグローバル研究会が平成27年12月8日(火)街中サテライトにて開催されました。今回は「地域の中小企業の支援事例と今後の注目事業」の演題にて、さいたま商工会議所中小企業相談所大宮支所、支所長の浜中真人氏にご講演を頂きました。

会員数12,000事業所を抱えるさいたま商工会議所、厳しい経営環境の中で健闘する中小企業の支援事例と新しい企業活動の取り組みについて

2010年のニッポン新事業創出大賞最優秀賞、経済産業大臣賞受賞以来の受賞となります。野長瀬教授は、今後は清成忠男賞に再度チャレンジしたいと抱負を述べておられます。

野長瀬教授は、一昨年に清成忠男賞のファイナリストとして登壇し受賞を逃したが、本年度は松田修一賞のファイナリストに選ばれ、東京大学産学連携本部イノベーション推進部長各務茂夫東京大学教授と同時に受賞されました。各務教授は東京大学のポテンシャルを基礎にIPO事例を多数創出し、野長瀬教授は地域企業家群のポテンシャルを引き出す事例を多数創出している点が評価されました。



左から二人目が野長瀬教授

平成27年10月31日  
11月1日に小樽商科大学にて行われた日本ベンチャー学会第18回全国大会にて、日本ベンチャー学会松田修一賞を受賞されました。

ベンチャー学会では論文・著書に対する清成忠男賞、起業支援活動に対する松田修一賞を設けております。



2016/12/8

ご紹介を頂きました。創業支援として、託児事業を始めたケースを紹介、当初は認可保育園を目指したが規制が多いため無認可を選択し、「学習塾のスタイルを参考に公的補助金も得て利用をのばした」、その結果4店舗を開設。その他、幾つかの失敗の事例も含みご紹介頂きました。非常に有意義な会となりました。

当日は、学生、企業や金融、行政の関係者等、約30数名のご参加を頂きました。

## 「コーヒーブレイクで今日は！」



MOT留学生と地域が作り出すホスピタリティ教育の種  
今年度もサクランボ、りんご狩り、小学校での授業など、地域や地元の学校に大変お世話になりました。

そして、地域にすばらしい国際交流の機会を留学生がプレゼントしてくれました。



小学生から頂いたお礼状の一枚にこんな一言がありました。  
「、、中国とベトナムとボリビアの皆さんは国の良い所を発表してくれて、全部行ってみたいと思いました。  
国それぞれに特徴があって消さないですごしていることはすごく良いことで大事にしなければいけないことなんだと思いました。」(抜粋)

来年もまた、相互に多様性を尊重し理解する様々なアクションを地域でおこして行きたいと思います。

《黒田 三佳 編集委員》





「平成27年9月ご卒業の皆さんをご紹介致します」



平成27年度9月の学位記授与式が9月30日(土)に行われました。  
ものづくり技術経営学専攻の卒業生は、「とうほくMITRAICコース」の6名、「価値創成コース」の2名の方々が栄えある学位記の授与を受けました。  
「卒業を迎えられた皆さんは、後列右から「価値創成コース」の阿部誠さん、高屋聡さん、後列3人目から「とうほくMITRAICコース」のウアンカ・ピラ・リナイアディさん、孫芸慈さん、羅小敏さん、前列右から、池田アレックス潤平さん、ポコレイチヨケ・ルイス・フェルナンドさん、マイタ・ダニエル・ロベルトさんです。  
どうぞ2年間の学びと体験を活かされて、これからの実社会で頑張ってください。また遠路ポリビア国から、一期生として米沢にいられた4名の方々に敬意を表します。  
皆さんの、今後の「活躍を」祈念申し上げます。

《MOT事務局便り》

「平成27年10月ご入学の皆さんをご紹介致します」

MOT事務局より、大学の動きやMOT専攻に関する情報をお知らせ致します。  
平成27年3月修了予定者修士論文 公聴会  
平成28年2月20日(土)12時45分  
15時0分(於・4号館中示範A)  
平成26年10月入学修士学位論文 中間発表会経過報告会  
平成28年2月20日(土)10時0分  
12時0分(於・4号館中示範A)  
平成27年度学位記授与式  
平成28年3月20日(日)11時0分  
16時0分(於・米沢市営体育館)

ものづくり技術経営学専攻の平成27年10月入学生は、「とうほくMITRAICコース」の5名の方々です。  
写真右から、グティエレス・ピント・マヌエルさん、グティエレス・リウリ・アンヘル・フェリックスさん、ロメロ・モスコソ・シャロン・アンドレアさん、于莉莉さん、サラス・ロチャ・ルディアントニオさんです。  
尚、于さん以外の4名がポリビア国から留学された第三期生です。



ラジオ深夜便 誕生日の花と短歌 365日  
短歌とエッセー  
鳥海昭子(編集:発行NHKサービスセンター)

1月17日(日)「本誌の発行日」の花は、  
「フキノトウ」キク科です。  
花言葉 : 待望  
短歌 : 雪国の春のたよりは フキノとう 顔だしたよと 晴れやかな声



平成28年1月17日は、あの6千人を超える方が亡くなった阪神大震災から21年目を迎えました。そして3月11日には、東日本大震災の日から5年目を迎えることとなります。  
復興住宅からの退去が出来ない方や、仮設住宅で先の見えない生活を送られている方々にとってもまだまだ解決出来ない課題が残っています。昨年末に庭の除染が済みましたが、表土も約3センチ剥がされましたが、それでもフキノトウの小さな芽が出てきました！ (編集委員W)

《編集後記》

—寄って酔って見習ったこと—

今年の6月東京大井町駅前に予約したホテル探しで、路地の立ち飲みバーで尋ねたのが縁。10年ほど東北の温泉に勤めていたというフィリピン人ママのカウンターには常に千円札を入れて飲んでいるお客がいて、飲むたびに当然減っていく「過ぎない」ためのシステムとのこと。偶然同郷出身の女性客と盛り上がっていたら、店に入ってきた隣の韓国料理のママさんに、「こちらへ」と誘われるままにそのカウンターへ身を移していた。隣客の説明では「この町は、千円/回\*3店/晩が普通」とのこと。  
そういえばここはオケラにも優しい競馬の町であったと気が付く。ママは一見客の私に「奢るから」という。今度は隣のロシアンバーであるが、ウオッカ2杯程飲んでギブアップした。3軒目で気が付いたが彼らはグルである、但し善良な。何故なら割と安いし、話題が豊富にあって楽しい分もサービス料は只。  
早速3店(国)連合経営を販売の4Pで分析した。①3店サプライチェーンの機会損失防止装置(Place)②異国風味のローテーション提供(Product)③外国語無料教室(Promotion)③高回転率で安売り実現(Price)等々の良質な経営資源を装備運用している。昨年は人種、貧困、宗教問題の負の連鎖がカオスを生み、テロを多発させ世界を震撼させたが、それらの憎しみとは無縁に異国の地を親和の精神で生活する外国人達の知恵を、酔って少し見習った次第である。  
今年こそ平和で良い年を祈願します。候の変化はいよいよ温暖化の影響が顕著に出てきていることを痛感致します。  
(大井町駅前「おぎ」「いい加減」「ロマーシカ」にて取材) 《浅間 秀蔵 編集委員》